

こんにちは。今回は二〇二六年京大國語、理系・第三問(古文)です。文章自体は読みやすく、典型的な内容ですが、「一見読みやすいが、実際に答えを書くとき一筋縄ではいかない」という、京大らしい問題でした。文法・単語・常識といった知識面と、論旨や文章全体を見る視点、記述のまとめ方など、勉強になる部分が多いと思います。

次の文は、中世の念仏行者たちが折々に弟子に語った言葉を集録した『一言芳談』の1節である。これを読んで、後の問に答えよ。(三〇点)

昔の人は、世を捨つるにつけて、清く素直なるふるまひをこそしたれ。このごろは遁世をあしく心得て、かへりてけぎたなきものになりあひたるなり。

*後世者といふ者は、木をこり水をくめども、後世を思ふ者の木こり水をくむにてあるべきなり。

それがしは、事(1)にふれて世間の不定(ふちやう)に、この身のあだなる事をのみ思ふあひだ、をりふしにつけて、起居のふるまひまでに、あやふき事おほくおぼゆるに、*御房(ごぼう)たちは、よにあぶなかりぬべきをりふしにも、いささかも思ひよせたる気色もなきなり。まして、うちふるまひたるありさまなど、よに思ふ事もなげにみゆるなり。されば、ただ無常(むじやう)のことわりも、いかに言はむにはよるべからず。いささかなりとも心にのせてのうへの事なり。

後世者は、いつも旅(3)に出でたる思ひに住するなり。雲のはて、海のはてに行くとも、この身のあらむかぎりは、かたのごとくの衣食住所なくてはかなふべからざれども、執すると執せざるとのことのほかにかはりたるなり。常に一夜のやどりにして、始終のすみかにあらずと存ずるには、さはりなく念仏の申さるるなり。

(『一言芳談』より)

注(*)

後世者||極楽往生を願う者。

御房たち||「御房」は僧侶の敬称。ここでは聞き手の弟子たちを指す。

問一 傍線部(1)を現代語訳せよ。

問二 傍線部(2)はどういうことか、説明せよ。

問三 傍線部(3)はどういうことか、説明せよ。

【解答】

問一 何かにつけて世の中の定まりがない様子により、自分の身がはかないことばかりを思ううちに、その時々において、日常の振る舞いさえも、極楽往生を果たすのに危ういことが多くあるように思われる

問二 全てが移り変わるという真理も、どのように口先で述べるかは重要ではなく、少しでも自分の心で真剣に捉えて振る舞うことの方が重要だということ。

問三 極楽往生を願う者は、たとえ現世で日常の暮らしを捨てることができなくとも、気持ちの上では日常への執着を断ち、現世は一時的なもので永遠に続くものではないと常に考え、暮らすものだということ。

【解説】

問一 「事にふれて世間の不定に、この身のあだなる事をのみ思ふあひだ、をりふしにつけて、起居のふるまひまでに、あやふき事おほくおぼゆる」

現代語訳する問題。方針としては、**文法・単語に忠実に訳しつつ、分かりにくい点があれば言葉を補っていく**。今回は「あやふき」の解釈が最大のポイントであった。「事に触れて」は現代で「折りに触れて」というのと同じで「何かにつけて」。「世間の不定」は「世の中が定まりがないこと、無常であること」。格助詞「に」は「において」と無難に訳してもよいが、「〜により」のように原因理由として下の内容に続けたい。「あだなり」|| 「はかない・無駄だ」は基本単語である。「あひだ」は名詞としてそのまま訳してもよいが、接続助詞に近い働きをして「〜ために・ので」と訳してもよいだろう。「起居のふるまひ」は直訳すれば「起きたり座ったりする振る舞い」だが、「日常の振る舞い」と意識しよう。「まで」は現代語「〜までも」でも構わないが、解答例では「〜さえ」と訳した。「あやふき」は「危険だ・不安だ」だが、**本文冒頭**の「昔の人は清く素直な振る舞いをしてきたが、最近の人々は汚らしい振る舞いをしている」という主張を踏まえ、極楽往生を果たすのに「危うい」という内容を補いたい。「汚らしい振る舞いをしないか危険だ・不安だ」という内容でもよいが、可能な限り直訳に近い形にしておく方が無難だろう。

問二 「無常のことわりも、いかに言はむにはよるべからず。いささかなりとも心にのせてのうへの事なり」

強者の戦略

傍線部説明問題。現代語訳と同様に、まずは傍線部を直訳した後で言葉を補う。傍線部の直訳は「無常の道理も、どのように言うかには依るはずもない。ほんのわずかでも心に乗せてからのことである」となる。「心に乗せる」は傍線部直前の弟子達への非難を踏まえれば「無常や往生を真面目に考える」ことであるのは理解できる。後は各部分を明確にして、解答をまとめよう。「無常のことわり」は基本的な古文常識。「言はむ」は「真剣に考える」こととの対比で「口先で言う」と理解する。また直前の文にある弟子たちの振る舞いを批判していることから、「振る舞い」という語も足しておく方がよいだろう。

問三 「旅に出でたる思ひに住する」

傍線部説明問題＋比喻の説明問題。「旅」は直後の「一夜のやどりにして」という記述から「現世を旅先のように、はかなく一時的なものだと捉えること」だと理解できる。古文常識としても頻出の表現である。後は傍線部以降の「たとえ現世で衣食住所を捨てることができなくても」、「執着を捨てる」という内容を盛り込む。傍線部「住す」は「思ひに住す」という表現から「心を決める」と考え、また本文全体で「日常の振る舞い」について注意を促していることから「生活する」という意味でも理解したい。弟子への戒めの言葉であるので、解答例は「後世者はくものだ・しなければならぬ」などでまとめ、「後世者はくしている」のように一般論のように書くのは避ける。

【現代語訳】

昔の人は、この世を捨てるにあたって、清らかで素直な振る舞いをこそしたものであった。(ところが)近ごろは、遁世(俗世を離れること)を間違って理解して、かえって見苦しく汚らしい人間になってしまっているのである。

極楽往生を願う者は、木を切り、水を汲んでも、あくまで後の世「来世」を思う者が木を切り水を汲むという状態であるべきである。

私は、何かにつけて世の中の無常において、自分の身がはかないことばかりを思うために、その時々において、世の中の定まりがない様子により、自分の身がはかないことばかりを思ううちに、その時々において、日常の振る舞いさえも、(極楽往生を果たすのに)危ういことが多くあるように思われるのだが、あなたたちは、実に(極楽往生を果たすのに)危うくなりそうな時々にも、少しも心を寄せているという様子もないのである。まして、ふとした振る舞いの様子などにおいては、全く気にすることもないように見えるのである。だからこそ、ただ無常の道理というものも、どのように口で言うかというようなことは心を寄せるべきことではない。ほんのわずかであっても自らの心に乗せてから(それに沿うように振る舞う)こと(心を寄せるべき)である。

後世者は、いつも旅に出ているような気持ちで自らを定める「生活する」のである。雲の果て、海の果てへ行くとしても、この身が生きている限りは、形式通りの衣食住がなければ成り立つはずはないが、それに執着することと執着しないことは全く違っているのである。常に(現世が)一夜の宿として、始終の住みかではないと承知していることにより、何の妨げもなく念仏を唱え申し上げられるのである。